

れき みる

となん歴史民だより vol.30

Morioka tonan history and folklore museum

平成24年3月31日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228

市民参加展「林田隆吉レガシーの絆を辿る相模原まつり展」

(期間：平成24年3月16日～7月15日)

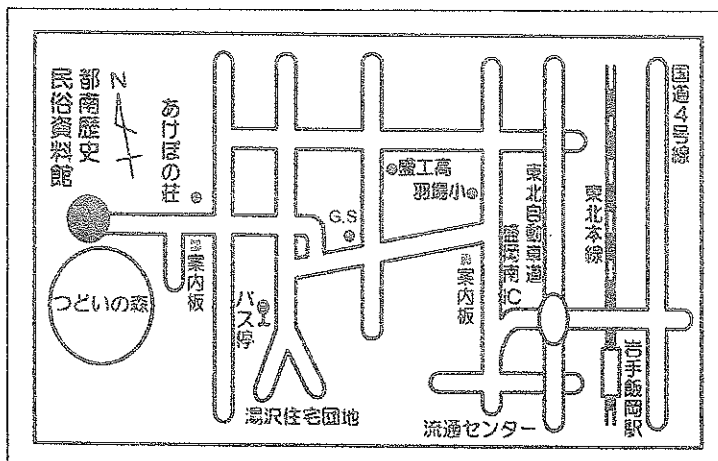


是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

- ・〈特別寄稿〉
高橋博泰「器荷街道・竹林」
- ・盛岡市先人記念館の紹介
- ・平成24年度当館行事予定
- ・資料は語る③
- ・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介③
- ・となんの昔ばなし③

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
- 年末年始

稲荷街道・^{くぬぎばやし} 桐林

岩手城郭研究所 高橋博恭

「崖^{がけ}」と呼ばれる矢巾町上赤林の高さ7mの段丘は、昭和20年代まで一面桐の木に覆われ、その林間を通り抜ける稲荷街道には松並木も残っていたといわれる。藩政期の山肝入文書には赤林村桐御林として「東西百間南北百五十間程平地御山迄より往還迄二丁余」（矢巾町史所収）とあり、小桐（幼木）を除く648本の桐（成木）が数えられている。藩営の林野（御留山）であり、藩が槍の柄を取ったと伝わるが、およそ8haあったとされる桐林が紅葉する壯観を想像すると「赤林」の地名の由来も肯ける。

この桐林は、天保5年（1834年）10月に始められた稲荷街道新道の工事起点であった。旧来、藩主の参詣の道は段丘に沿って南下する現・県道不動川久保線（通称・志和街道）であったと見られるが、新道は桐林を伐り拓いて広宮沢、煙山、和味の山手に向っている。都南歴史民俗資料館所蔵の『志和稲荷山道通御普請大凡御人足積り并橋之掛替入用御代物メ高心扣帳』には「赤林村幅ノ上打初より」とある。この中で「幅ノ上」とは、北上川流域に多い段丘崖を意味する「はば」地名に通じるもので、ここでは段丘の上を指すものと考えられる。さらに歟入の神事を執り行った「打初」の位置は、設計段階の図と見られる『志和稲荷街道詳細図』（同資料館所蔵）と完成後の図と見られる『志和稲荷御道筋絵図』（志和稲荷神社所蔵）を比較すると、現在の県道120号線（通称・不動盛岡線）と交差する手前、バス停留所「崖」と餓死供養塔（天保2年）などの古碑群のあたりに特定できる。そしてこの先は『志和稲荷御道筋絵図』に描かれた「打福橋」「余慶橋」「塚野脇橋」「赤林一里塚」と続くが、この短い区間の橋名は、「打福」が打初に、「余慶」は余計（排水）に、「塚野脇」は一里塚にかけた絵図上の雅称で、いずれも用水堰に架かる目立たない土橋でもあり名称としてこの土地に定着しなかったようである。しかしここ赤林で伐採された桐は、この街道普請で大白沢橋（矢巾町和味）の用材となっている。「志和稲荷新道切披御用書」（不動村誌所収）には「大白沢橋釣木四間宛四本うら木にて相用元木七、八、九間も有之誠に上杉に御座候、外桐は赤林村より出る」とある。桐の樹幹は、堅く中段まで枝が少なく真っ直ぐ伸びるため、主に橋脚や神社の鳥居、ほかには道具の柄や木炭の堅炭などとなった。

この稲荷街道新道が完成し、藩主利済の初の社参は翌年の天保6年（1835年）5月9日。前掲の『心扣帳』には、「五月七日御見分同九日殿様御社参之節羽々の上（幅ノ上）高濱様前の北土手脇にて御出迎え順列之次第」として、普請奉行をはじめ普請に関わった村々の責任者の名が連ねられている。旧暦では田植えも終わった深緑の季節、伐り拓かれた桐林の新道の傍らに、工事関係者が勢揃いし、藩主社参の行列を出迎えたものとみられる。領民の繁忙期を避けながらの慌ただしい普請であったに違いない。しかしそこには参詣の道であると同時に、新道開削に伴う多くの架橋と沿道の溜池・用水堰整備や植樹など、紫波地方西部の開発の道としての様相が見えてくる。

「赤林最後の7本」と言われた桐（赤林上浅子・吉田家屋敷林）が伐採されたのは平成19年と聞く。その後この段丘上での桐の姿は諦められていた。ところが昨年11月、この赤林浅子地内に残る雑木林の林縁（北緯39度38分22秒、東経141度8分9秒±5m）で、雑木に混じり唯の一本、樹高25.5m、胸高直径35.9cmの桐が見つかった。森林総合研究所の齋藤智之氏（チシマ笹研究）に鑑定していただくと、鋸歯状の葉と丸い堅果の特徴から桐の成木との確証を得ることができた。しかし、そこから北に200mの距離の稲荷街道沿いは、桐林も松並木も消えて久しく、街道普請「打初」の位置と思しきあたりには、柳の古木が根元の古碑を包むように立つだけである。

盛岡市先人記念館紹介

盛岡市先人記念館は、その設置の目的に「郷土の豊かな精神文化の礎を築いた多くのすぐれた先人を顕彰し、遺徳を偲ぶとともにそれぞれの偉大な人間形成の過程を学ぶなど、広く市民の教育文化の向上を図り、あわせて多くの人材を輩出した盛岡を広く紹介しようとするものである」とあるように130名の先人を紹介し、ボランティアの育成やさまざまな展示企画を通してその役割を果たしています。館内の展示室は新渡戸稲造記念室・米内光政記念室・金田一京助記念室・総合展示室という構成になっており、そのほかに資料閲覧室・ホールが完備され先人に関する資料の閲覧や学芸員講座などが行われています。また、先人紹介検索放映システムがあり、映像と音声でよりわかりやすい解説も行われています。



◆開館時間：9:00～17:00（入館は16:30まで）

◆休館日：毎週月曜（祝祭日の場合は翌平日）

毎月最終火曜日

年末年始（12月29日～1月3日）

◆入館料：

〈個人〉

一般：300円/高校生：200円/小中学生：100円

〈団体〉

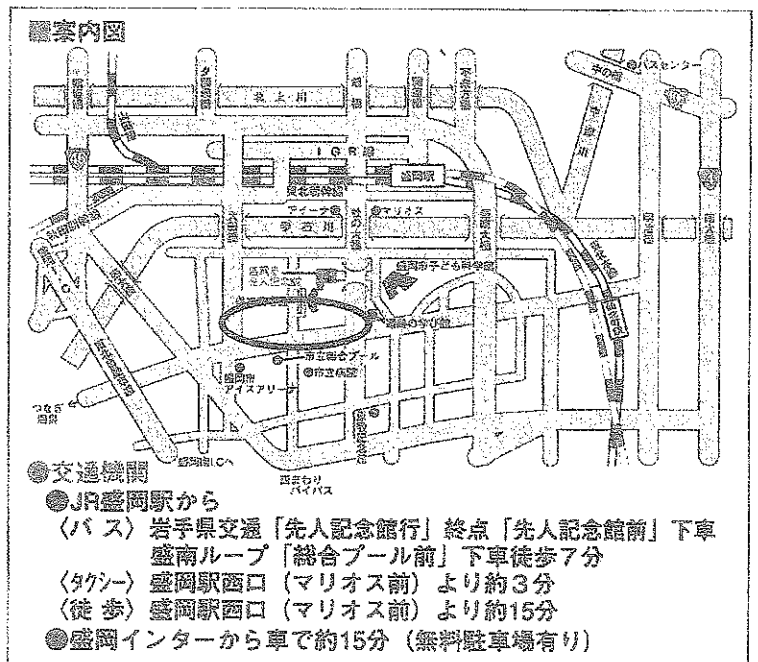
一般：240円/高校生：160円/小中学生：80円

◆所在地：盛岡市本宮字蛇屋敷2-2

◆お問い合わせ：019-659-3338（代表）

019-659-3387（Fax）

◆展示内容：先人に関する資料



※平成24年度盛岡市先人記念館事業（展示情報・一部）参考・引用：「盛岡市先人記念館パンフレット」『平成21年盛岡市先人記念館館報』

事業名	日時
新渡戸稲造生誕150年記念第47回企画展「新渡戸稲造のおくりもの」	7月28日（土）～9月30日（日）
第48回企画展「“民藝”に魅せられた人々」	10月6日（土）～12月9日（日）
第7回盛岡の古町名展「仙北町かいわい」	12月15日（土）～2月17日（日）
収蔵資料展①「盛岡中学の黄金世代—金田一京助・石川啄木たちの青春群像—」	4月7日（土）～5月13日（日） 2月23日（土）～3月31日（日）
収蔵資料展②「平成23年新収蔵資料展」	5月19日（土）～7月22日（日）

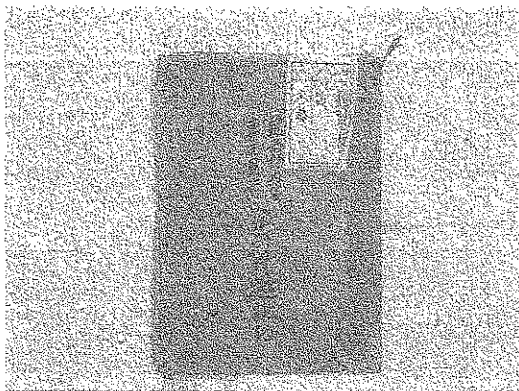
※紙幅の関係上、展示情報の一部のみをご紹介しますが、盛岡市先人記念館では企画展示のほか「シリーズ講座」・「金野静一特別講座」・「館長講座」・「学芸員講座」・「日帰りツアー」を企画しておりますので詳しくは上記お問い合わせ先までご連絡ください。

平成24年度盛岡市都南歴史民俗資料館行事予定

市民参加展 澤井敬一コレクション 三陸鉄道開業記念～28年の軌跡～	平成24年4月28日（土）～5月27日（日）
市民参加展 鎌田隆コレクション 昭和のうたっこ展	平成24年7月20日（金）～8月19日（日）
市民参加展 澤井敬一コレクション 著名寺社巡り	平成24年9月1日（土）～9月30日（日）
企画展 都南地区の大念仏剣舞	平成24年10月10日（水）～12月9日（日）
市民参加展 鎌田コレクション 第3回旧暦ひなまつり展	平成25年3月15日（金）～4月14日（日）

※当館の運営上、事業が変更される場合があります。詳しくは当館までお問い合わせください。

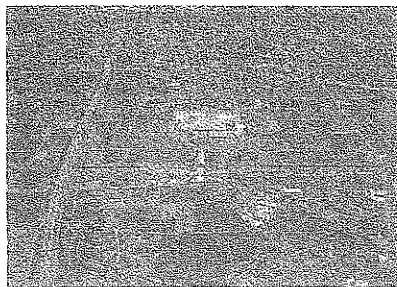
資料は語る⑩



【見前村大字東西見前徴兵待遇規約】

前号では、日露戦争時の陸軍の軍服を紹介しましたので、今回も日露戦争に関わるものをご紹介しますと思います。今回紹介する「見前村大字東西見前徴兵待遇規約」（以下「規約」と略す）という資料は、日露戦争へ出征する兵士に対して餞別金や戦死した際の義捐金、軍功を立てた物への報奨金の規定を定めたものです。これらのお金は、村の人達が出し合って出征兵士に渡されました。村人は貧富の差によって1~10等級に区分されそれぞれの財力に従って出す金額が定められていました。実際に見前村からは2名の戦死者が出て、「規約」に定められた金額が葬式の際に遺族に対して支払われました。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介⑩



志波城跡

平安時代初頭、延暦22年(803)に朝廷が造営した古代城柵で、北上川と雫石川の合流地点付近に広がる平坦地(下太田方八丁周辺)に位置しています。城柵とは蝦夷(エミシ)と呼ばれる東北地方の人々を治めるための行政府で、志波城は古代陸奥国最北端・最大級の城柵として坂上田村麻呂により築かれました。現在は国指定史跡に指定され、史跡内は志波城古代公園として整備されています。公園内には案内所もあり、「志波城だより」が発刊されています。4月からは「志波城古代公園バス停」が設置されより便利になります。詳しくは公園内案内所(019-658-1710)にお問い合わせください。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

とんの昔ばなし二十

『二所の関部屋』

黒川の横枕の先祖にとっても強い相撲取りがありました。彼は、相撲取りとしての技術を試すために修行の旅に出ました。いたるところで道場破りを続け負けることを知らず、技術は益々上り強くなり四股名を「二所の関」と称しました。

さて、彼が秋田に行ったときのことです。秋田は全国でも相撲が盛んなところで強い相撲取りがたくさんいました。秋田には三吉神社という相撲取りを祀った神社があり、そこに生前から祀られる程のつわものの相撲取りがありました。二所の関は、其の者と試合をしましたが、三番とも鮮やかに勝ってしまいました。秋田の人は、その強さに感嘆の声を上げ、宴を催し二所の関をもてなしました。

しかし、彼は不安でした。試合に勝った相撲取りを歓待と見せかけて騙し討ちをするという噂を聞いていたからです。つまらない騒ぎを起こしたくないと、彼はこっそり抜けだし、秋田街道を南下して江戸に行きました。江戸に行った彼は大相撲に入り「二所ヶ関部屋」を創設しました。この部屋からは、つぎつぎと優秀な相撲取りが出て、この名が高くなっていきました。これが現在の「二所ヶ関部屋」です。

出典：『とんの民話』（都南歴史民俗資料館、一九八八）。